

第18回 2013年6月4日(火)

ゲスト 脇浜 紀子 読売テレビ アナウンサー

テーマ 「テレビ制作の現場にいて 思うこと」

司会 本当に真夏のような暑さですが、ようこそご出席くださいました。

今回は現役の毎日放送 長井展光氏にお越しいただき、ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) というような新しいメディアとテレビとの関係についてお話を伺いました。今回は前回に引き続き“現役ばりばりシリーズ”の第二弾ということで読売テレビのアナウンサー脇浜紀子さんをお招きしています。

脇浜さんは昨年大阪で開かれた「高橋信三記念基金創立 20 周年・シンポジウム」にパネリストの一人として出席されています。このシンポジウムの模様は、識者の論考、提言を含めて一冊の本 (『テレビの未来と可能性』) にまとめられました。お手元の資料は脇浜さんの発言を中心に抜粋したものです。

<シンポジウムのパネリスト>

音好宏 (上智大教授)、黒田勇(関大教授)、  
杉本誠司 (ニワンゴ社長、ニコニコ動画)、  
石田英司 (MBS)、松本修 (ABC)、  
老邑敬子 (KTV)、脇浜紀子 (YTV)

脇浜さんのプロフィールを紹介いたします。

神戸大学法学部を卒業されて、アナウンサーとして読売テレビに入社されました。

「ズームイン!!朝!」などを担当したあと、1999年南カリフォルニア大学に留学。私はアメリカンフットボールの中継を担当していましたので、南カリフォルニア大学といえば、「サザンキャル」という名前を思い出します。強くて格好いい大学で知られています。その大学でコミュニケーションマネジメント修士号を取得。帰国後、在職のまま大阪大学大学院で研究を深め、国際公共政策で博士号を取得されています。仕事をされながら博士号を取られたということですが、個人的にもすごいことだと思いますし、読売テレビの懐の深さを感じまして羨ましいなと思います。また 著書には「テレビ局がつぶれる日」(東洋経済新報社、2001年12月20日発行)、なんだかおっかないタイトルの本を出版されています。

私も今日初めてお目にかかるのですが、テレビ(画面)ではよくお会いしています。普段このように関西弁でざっくばらんに話されますが、テレビの向こう側では標準語になってころっと (プロのアナウンサーに) 変わります。

今日は現役でテレビの制作に携わっていて、日ごろ感じておられることを1時間ほど話していただき、そのあと質疑に入りたいと思います。

改めてご紹介いたします。読売テレビのアナウンサー脇浜紀子さんです(拍手)。

脇浜アナウンサー

本日はお招きいただきありがとうございます。

“現役バリバリシリーズ”だと言われたのですが、そう言われると“そうですね”となかなか言いづらい。私は1990年、平成2年の入社です。いわゆる仕事ができないと言われるバブル入社の子供類に入るかと思えます。もうちょっと分かりやすく言うと丙午です。それなりの年齢になっています。

ありがたいことにまだ一応現役のアナウンサーとして現場に出て取材しリポートしています。先日の淡路島の地震（2013年4月13日、M6.3、震度6弱）のときもいち早く現場に行って被害の状況を伝えました。私はまだ頑張るぞというところですよ。

今日は「テレビ制作の現場にいて、思うこと」というお題をいただいておりますので、話している間に合いの手を入れていただいたり、質問をはさんでいただいたりしたほうがいようなざっくりしたテーマかなと思います。ところで皆さんの（放送局での）職場は？

（出席者から、アナウンサー、報道、営業、編成、技術、そして放送局では社長をなさった方もおられます）

脇浜アナウンサー

そうそうたる先輩方の前でいきなり何を話せばいいか戸惑いますが、とりあえずもう少しプロフィールを補足するところから始めたいと思います。

脇浜さんは前半、情報系テレビ番組「ズームイン！！朝！」を事例に、急激に進むもの作り現場の変化、とりわけ制作現場の分業化、マニュアル化について、行動するキャスター・リポーターの立場から言及した。後半は、もう一つの顔、研究者の立場から「地上波テレビの“地域情報”」について考察、豊富なデータを提示しながら、今地上波テレビがかかえる問題点を明らかにした。

以下は質疑を含めて2時間を超える講話をまとめた記録である。

脇浜アナウンサー

1990年に入社し、翌年から足掛け8年くらい「ズームイン！！朝！」（NTV系の情報番組、7時～8時半）を担当することになる。

「ズームイン！！朝！」という番組は全部中継で、スタジオは東京の日本テレビの「マイスタ」だけ、そのスタジオには徳光和夫（初代）、福留功男、福沢 朗らがいて、系列各局は中継車を出し、とにかく外から、現場から“日本の朝”を中継した。

「ズームイン！！朝！」（1979年3月開始）

「系列各局のアナウンサーがセーターとジーンズといった軽快なスタイルで競演、時には方言も交え、画

一化した中央の大番組に新風を吹き込んだ。」

『放送史事典』（学友会センター、1992年）

大阪にある読売テレビは関西一円をカバーすることになるので、私は和歌山に行ったり、日本海側に行ったり、泊まりになることも多かった。何しろ外からの中継なので当然暑さ、寒さ、雨風にさらされるという状況の中で毎日新しい現場を経験し仕事をした。そしてカメラをどの位置にセットするか、カット割をどうするかなど生中継の制作ノウハウをぶつかって体で覚えた。その当時の経験は自分の力になっていると考える。

そのベースがあったので、今もテレビのことを研究してみたり、今後のメディアのことを研究しようと思ったりする。やはり原点は「ズームイン！！朝！」にあるという気がする。特に「阪神大震災」（1995年1月17日）の報道の経験がきっかけでもう少しメディアというものを客観的に見る必要があるのではと思い、研究を続けている（テレビにおける「地域情報」の発信の問題、放送局と免許など）。司会者から紹介のあった本「テレビ局がつぶれる日」は2001年に発行している。当時の社長はえらい本を出したなど言いながら笑って本をうけとってくれた、懐の深い会社だ。ただこの本に書いたのは、テレビへのエールというかデジタルというテクノロジーの発展で明らかにメディアの形が変わりつつある中で、テレビというのも構造改革していかないと取り残されてしまいますよといったことを記している。こんな本を書いたことがきっかけで大学での講演に呼ばれたり、いろいろところで話をしてくれと頼まれたりする機会が増えていった。

インターネットにもすごく興味があり、10年ほど前から自分のことを“**“**電脳アナ**”**””と言っている。今どこの放送局もホームページを持つことが当たり前の時代になっているが、読売テレビが最初にインターネットにホームページを立ち上げたときは会社紹介のページしかなかった。会社の社屋の写真が一枚あって、読売テレビ放送株式会社と住所が書いてあるだけであった。それではだめでしょうということでアナウンサーのページを作った。HTML（Hyper Text Markup Language）というホームページを作るための言語を使って、みんなのプロフィールを書いた。写真も自分でデジカメ（2万円くらい）を買って、アナウンサーの先輩、後輩の写真を撮って回った。読売テレビのホームページの最初のコンテンツは私が作った。新しいことをやらなければいけないという思いも強く、そんなこともやったりした。

最近の話で言うと、私は苦節10年くらいの念願であったが、2か月ほど前に読売テレビが「ニコニコ動画公式チャンネル」を設立した。皆さん「ニコニコ動画」ってご存知だろうか。（前回、長井氏の講話でも話題になった）。画面にぱちぱちと文字がいっぱいとんでくるのが「ニコニコ動画」。読売テレビの「ニコニコ動画公式チャンネル」で何か新しいことができないか検討しているのが現状である。

### <画面に字幕スーパー溢れる～もの作り現場に変化>

そんなプロフィールだが、「テレビの制作現場にいて、思うこと」ということで考えてきたのが、テレビって、やっぱりもの作りの現場だと思う。

技術から記者の方、すべてもの作りの現場にいる。私は入社24年目になるが、この20数年の間にすごく変わったという気がする。私が「ズームイン!!朝!」のスタッフとして飛び回っていたころのもの作りの仕方と今のもの作りの仕方とはものすごく変わってきている。例えば現象面で言うと、とにかく（今のテレビ画面に）字幕スーパーが多すぎないか。これでもかこれでもかというくらいに文字が出てくる。かつてはせいぜいゲストが出演したときの名前の字幕スーパーとか、タテイチに入れたりする程度だった。ところが今はまず出演者紹介の名前、例えば「〇〇大学の〇〇教授」のスーパーが出る。（そして同じ画面に）「〇〇教授が語る〇〇の真相」（サブタイトル的な）な文字が出る。さらに画面下にはインタビューのコメントフォローの字幕スーパー。いつのころからかテレビ画面で語っている人の言葉の内容が全部文字でスーパーされるようになった。一番ひどい話ではテレビ画面でしゃべっている人がまだ語っていない内容の部分が字幕で先に出てしまうケースがよく見られる。あれは許せない。数年前、私がある企画ものを作ったとき、字幕が先行するのだけは止めてほしいと注文をつけたことがある。インタビューを受けている人がまだしゃべっていないのに、その中身が先に文字スーパーで表示されてしまう。一行目までは話の音声と字幕とは一致しているが、二行目に記されている内容はまだ話し始めていないのに、字幕の文字が先行して出てしまうケースがある。

出席者 そのこのところは、私も一番伺いたかったところ、画面にいっぱい文字が書いてあると、我々は目がついていけない。一体どこを読めばいいのか。それと同時に折角テレビがこんなにきれいな画面になっているのに文字が溢れ、その美しさを見せることを忘れていてのではないかと思ったりする。

### 脇浜アナウンサー

コメントフォローの字幕スーパーは、もともとテレビ画面の中で語っている人の話（内容）についてより理解を深めてもらおうと始めた。ちょっと聞き取りにくいしゃべり方をしているときなどは、話の中身を字幕でフォローして文字表示すれば分かりやすくなるだろう考えたようだ。

きちっと情報が伝わるようにとコメントフォローのスーパーを出し始めたはずだったが、その内にまだ登場人物が言っていない事柄まで字幕で先に出てしまうということが起き始めた。

映像でインタビューするというのは、その人の表情とか、(話の)間とかを生かすため、そこが新聞とは異なる表現方法である。どういう顔(表情)でうーんと言ったあとに“これはね”とつぶやいたのか、その間を見せないといけないのに、何か文字で処理してしまう。最初の基本というか、原点というか(テレビメディアが持っている本来の)表現方法を忘れてしまっていると思う。

サイドスーパーにしても、最近スポーツ番組でも使い始めた。「このあと 石川遼が単独トップ」とか、「マー君登場 リベンジなるか」とか生放送なのに次の予告をしてしまう。もともとサイドスーパーというのは途中から見た人のために、今何をやっているか分かるように伝えるということで始めたテクニックだった。

要するにもの作りの現場ですごくマニュアル化が進んでいるということである。

ところでこのように字幕スーパーを画面にいっぱい入れ出したのは日本テレビ系「進め!電波少年」がはしりだったと思う。タレントの言った言葉を面白おかしく画面に表示し始めた。さらに文字を動かす、文字のカラー化などの演出を試みた(トークのCG化)。「進め!電波少年」が何故派手な字幕スーパーを出し始めたかといえば、低予算だったからだといわれている。深夜番組でかなり低予算、しかもちゃんとしたENGカメラを使わなかった。当時家庭用として画質の悪いカメラを持って世界中を旅するという企画が多かった。

{注}「進め!電波少年」(1992年開始)

司会は松村邦洋と松本明子

視聴者の知りたい、見たいと思うことを

アポなしで突撃取材する。それが評判にもなったが、問題も起きた。

低予算だからスタジオも使わず演出で見せようという、そこから“字幕で遊ぼう”というアイデアが生まれてきた。それは持ち運びの便利な家庭用カメラによるアポなし取材とともに、よく考えられた演出であった。

ただこういった手法も、演出の部分だけが一人歩きして、マニュアル化していった感じがする。やたらパターン化、形式化しているというか、今の人たちはテレビってこんなものでしょうとすべてマニュアルに沿って作業をしているように思う。だから何故そうするのか聞いてみても答えられない。前回もそうだったし、前々回もそうだったと答えるだけである。

文字スーパーの出し方が変わってきたことによって、一番被害をこうむるのは中継現場である。

「じゃ今日はハービス大阪にやってきました。皆さん、ここは何だと思えます。ここのお店 何だと思えます。」とアナウンサーが一生懸命興味を引きつけようと語っているのに、もう画面にはサイドスーパーで「100万円のワインを売る店」と表示されてしまっている。話の起承転結の中で、「さて、今日はどこに来たかと言

ますと、今からすばらしいものをお見せしますよ。何だと思えます」と言っているのに、もう字幕が出ている。その答えがサイドスーパーの字幕で先に出てしまっている。全体の話の起承転結とか、今日はどういう見せ場をつくって、どういう話の流れで見せようとしているかといった全体像を把握してその字幕を付けようとしているのではなくて、マニュアルに沿って（ただ機械的に）作業を進めようとするため、こういった不手際（アナウンサーの音声と画面の不一致）が生じてしまうのだと思う。もちろん失敗したら、あとで反省するのだが、その反省が生かされず失敗を繰り返していく。

何故こんなことが起きるのか。今のテレビの制作現場にはやらなければならないことが増えすぎ、恐ろしく分業化が進んでいるためだと考える。字幕スーパーの作業を例にとってみても、三種類以上発注しなければならない。CG のオペレーター、字幕スーパーのエッジの色を考えるオペレーター、かつてはなかった何とかのオペレーターといった形で作業を分担。そして AD にしても〇〇専用の AD と細かく分かれている。2 時間近い情報系ワイド番組のスタジオに行くと、誰が何をしているか分からないくらい人（スタッフ）が溢れている。放送用のテープをスタジオに持って走っていく人、10 秒前と時間だけを告げる人など業務がますます細分化されている。こういった分野は制作会社のスタッフが担っているが、入れ替えが激しく不安定な職場環境になっている。

かつては新聞、テレビは憧れの職業だったが、最近はそうでもないようだ。斜陽産業という言われ方もされるのはちょっと辛いなと思って聞いている。

#### <中継現場にも変化 分業化進む>

ちょっと昔話になるが、「ズームイン！！朝！」のころは中継現場には、私（キャスター）がいて AD がいる。そしてカメラマン、カメラアシスタントの 4 人だけだった。それに中継車がある。中継車に TK（タイムキーパー）はいない。ディレクター、音声 TD、VE がいる。スイッチャーはいない。ディレクターがスイッチングを担当する。カメラは 2 カメか、3 カメまで。中継現場も音声担当のフロアがないのでマイクがちゃんとセットされているかなど自分または AD がチェックする。それに TK がいないので AD がタイム読みをしてくれる。ストップウォッチを二つ持って中継全体の放送時間と途中で挟み込まれている原稿読みの時間も AD が伝えてくれる。当時の AD は中継放送全体の流れをよくつかんでいた。

ところが今の（中継現場の）AD はストップウォッチを持っていない。中継現場で AD に何を聞いても、インカム（インターカム）を通して中継車か本社に問い合わせ、それをオウム返しに伝えてくるだけ。今の現場の AD はキューシートさえ持っていない現状である。いつのころからか AD の役割が変わってしまった。かつては少人数（のスタッフ）が全体像を把握して動いていたというのがテレビ

現場のもの作りだと思うのだが、今は分業が進みすぎて一人ひとりが全体像を把握していない。全体像を把握していないということは、自分たちがこの中継を通して何を伝えたいのか把握していないということなので、とてもこれはよろしくないのではないかと危惧している。

全体を把握していないという意味で起きたエピソードを一つ紹介すると、4年ほど前に京都・清水寺の恒例「今年の漢字」発表の生中継をしたときのことだった。

「今年の漢字」の発表をテレビで生中継するのは初めて、私もこれは腕の見せどころやなと思って、カメラ位置などディレクターとも相談し、“盛り上げる中継”の準備を一生懸命した。森貫主が大きな和紙の前に出てきて「さあ、今年はどんな一文字になるか」、生放送で注目の漢字をアップで映し出す予定であった。ところが森貫主とともに前に出てきて最初にあいさつした漢検（日本漢字能力検定協会）の会長が「今年の漢字は〇〇です」と、森貫主が大きな和紙に書き始める前に発表してしまったのである。

（予定が突然変わったのか）中継が終わってから、ディレクターに事情を聞いた。

「何これ、どうなっているの、漢検おかしすぎるよ、森貫主が書き始めるまで黙っていることになっていたのと違うの」と言ったところ、ディレクターは「いや私は知っていました」と言うのである。それなら何故私に言ってくれなかったのかと問い詰めた。

私が「ズームイン！！朝！」の中継をしていたころにはなかったことなので、一体もの作りの現場に、生中継の現場に何が起きているのかと本当に思った。

ちなみに私が現場で烈火のごとく怒ったので、その次の年から漢検会長のあいさつがなくなり、森貫主が大きな和紙に「今年の漢字」を一文字書いて初めて公表ということになった。

<気になる言葉“キーワードください” マニュアル化も進む>

気になるということ言えば、スタッフから“キーワードください”と言われること。VTRを入れるきっかけのキーワード（きっかけの言葉）とか、一つの話が終わり次のコーナーに行くときのキーワードとか、とにかく“キーワードください” “キーワードください”と言ってくる。私は絶対に（次の場面への移行が）分かるように話すからと言っても（マニュアル通り）キーワードを求めてくる。生放送でやっているのだから話の流れで、しかも出演者とのやりとりがあったら、そんなキーワードで終わるといふことにはならない。

かつてはそんなことを言わなくても通じた。今の人“何という言葉で締めますか”と聞いてくる。マニュアル化だと思う。とにかくキーワード“以上〇〇でした”を聞いてから、次のVTRを発射（スタート）したいのだろう。内容を聞いていて、この話はまとまったな、面白かったなと思った時点で“ということで

した”と私が言ったら、そこがキーワードということでもいいんじゃないだろうか。私はこのキーワードがいやで抵抗し続けている。

テレビの制作現場にいて、分業化、マニュアル化が急速に進み、現場がすごく変わってきたなと感じている。

#### <ロケ（取材）のやり方も変わる ここにも“ぶつ切り”分業>

さらにロケ（取材）のやり方も変わってきた。例えば食べもの屋さんや職人さんの取材に行くときなど、私が「ズームイン！！朝！」を担当していたころは、技術スタッフと待ち合わせる段階から取材を終え解散するところまで全部付き合っていた。朝 7 時集合、そしてスタッフと一緒にロケ車に乗って現場に着く。ロケしている間も当然ずっと居て、モノ撮り（商品、展示物、作品など）の時間などあって、その間、私はレポートがいないので、ゲストの方と間をつないだり、退屈させないようにしたりとか、そこで職人さんの話を引き出したりする。そして“そろそろインタビューいきます”ということになる。集合するところから解散までずっとスタッフと一緒にという流れで仕事をしてきた。そういう仕事の進め方が普通だった。ところが今（の撮影方法）は「じゃアナウンサーさん、試食の“はし入れ”と“食べる感想”のところだけ来てください」といわゆる“アリバイカット”があればいいということになっている。だから 12 時～2 時の間だけ来てもらったらいいいということになる。レストランに行って、何か食べて“ああおいしいですね”と言って帰る（というのがグルメロケ）。それで取材したのかなと考え込んでしまう。私は入れ込むほうなので、取材だけでなく、編集にも立ち会い、ああだ、こうだと意見を言って、このシーンひっくり返したほうがいいんじゃないかと（注文をつれたり）、また原稿も自分の言葉に直したかったのでリライトしていた。最近は現場へ取材に行くリポーターとプレゼン（プレゼンテーション）するアナウンサーが別々になることがよくある。結局、自ら現場に行って自分がいろいろなことを感じ、カメラの撮影の合間をぬって人と会って話を聞き、（その取材の成果を）如何に 3 分のレポートなら、その 3 分の中に反映できるかがテレビの取材者の面白さだったと思う。ところが今は全部“ぶつ切り”の分業で、アナウンサーはここで食事をしたら OK。あと編集はほかの人がやって、プレゼンするのも別の人。それでいいんだろうか。私は非常に不幸だと思っている。

（こういった取材方法によって）演出方法が広がったり、労働時間が減ったりとか、いいところもあるのだが、それでは取材者の力はアップしないだろうと思う。

#### <「ズームイン」の時代にできて、今できないこと 三つ>

「ズームイン！！朝！」でやっていたのに、今できなくなったことを三つ挙げたい。私が「ズームイン」で頑張っていたときに「プロ野球入れ込み情報」という

名物コーナーがあった。これはそれぞれの局が地元のプロ野球を応援するコーナーで、読売テレビは阪神タイガース、中京テレビは中日ドラゴンズ、広島テレビは広島カープ。東京（NTV）から福留キャスターが読売ジャイアンツを応援する。このコーナーは（キャスター同士の）やりとりが売り物だった。“何言ってるんだ。留さん（福留）、そこはね、阪神のほうが強かったじゃないですか”と（激しくやりあう）。その丁々発止のやりとりが面白くて大変な人気コーナーになった。今現場を離れて大分時間が経つのに未だに私は“阪神の姉さん”と言われている。それくらい印象的なコーナーだった。

みんながしょうもない野球の話でけんかするというコーナーであったが、（こういった丁々発止のやりとりが）今はできない。何故かという、デジタル化で地上デジタル放送になったので遅延が生じるようになった。中継の送り先などすべて、画像と音声のズレ、遅れが生じる（送信時にデータを圧縮。受信機で復元する際2秒くらい遅れる）ので零コンマ何秒の間合いが大切な言葉のやりとり、掛け合いができなくなった。この遅延は中継現場で深刻な問題になっている。各局キャスターの絶妙なやりとりが売りの名物コーナーは地デジのため消えることになった。二つ目は、「ズームイン」の番組冒頭に「天気リレー」というこれもまた名物コーナーがあった。4局か5局が毎日順番に25秒間（後に20秒）でその地域の天気予報を伝えていく。「おはようございます。今日の大阪は晴れです。今日は海遊館に来ています」みたいなことをしゃべりながら、温度計を示し「今の気温は15度、日中は30度まで上がるでしょう。次の中継は名古屋の〇〇さん」と言ってリレーでつないでいく。この「天気リレー中継」は各局のカメラマンが映像にこだわって、その25秒に命をかけた。海の特集、花の特集、各局のカメラマンが空の美しさ、花の美しさなどインパクトのある映像を送り出し競い合った。

そこで何が起こるかと言えば、5局が25秒ずつリレーし、「天気リレー」が終わり、CMに入る前に7秒間の「提供バック」という枠がある。その7秒間の「提供バック」の映像を日本テレビは直前に放送していた「天気リレー」の中継映像から選ぶのだが、どの局の映像を選ぶかは直前まで決めていない。（日テレのディレクターは）その日の「天気リレー」の5局の映像を見て、一番よかった（印象度の強かった）局の映像を選び、「提供バック」として放送する。だからわずか7秒間であるが、各局のカメラマンは2カメを駆使して絵作りに知恵を絞るのである。そして晴れてその7秒枠に選ばれたときには“来た（わがスタッフが撮った映像がセレクトされた）。やった”の歓声が上がり、中継スタッフ全員で喜びをわかちあった。「ズームイン」で中継を担当していたときは、制作現場にこんな興奮があった。今は正直言って7秒間の映像にかける雰囲気はない。画面を字幕スーパーで優先するのではなくなった。

私は、いい映像を撮ろうと競い合ってきた全国のカメラマンに囲まれて仕事をし

てきたのでとても恵まれていたと思う。

出席者 今の現場の人たちは冷めているのか。

脇浜アナウンサー

生中継を見ているも、クロマキー（chroma key 画面合成の技法）のできるのではないかといった中継をしている。まずネームスーパーのことなど考えた映像を求めてくる。例えばグランフロント大阪からの中継をするときでも、まず生中継のダイナミックさを見せないといけないのに、字幕スーパーを処理するための人物のバストショットを撮って欲しいと注文してくる。（という風に形から入ろうとする）。先ほども触れたが、今日は何を伝えたいのかということが共有されていない。そこから番組作りが始まるのにそこが一番できていないのではないかと思う。私はカメラの人からいろいろ仕事を教えてもらったが、今一人ひとりの技術者のスキルが落ちてきたのではないかと感じる。

ということで「ズームイン」のときにできて、今できなくなったことを二つ挙げたが、最後の一つは「シネマ天国」という映画コーナーのこと。週一回自分で映画を見に行き映画批評するという映画紹介のコーナーを持っていた。自分たちで取り上げる映画を選んでた。だから正直ちょっとくらい“B級でしたね”とくさしてもよかった。ところが最近映画コーナーというのはテレビ局が出資して製作した映画が多くなり、紹介したい映画が自由に選べなくなった。まともな映画コーナーができなくなってしまったということになる。

テレビ界にいて 20 数年になるが、ずい分変わってきたなと思っている。今は変わった残念な部分だけ強調して言ったが、もちろんいろいろ進化した面もある。CGの技術が上がり表現の幅が広がり、新しい表現方法が出てきたことは評価してよい。ただその技術が十分生かしきれていないという現状がある。

また地デジが始まってマルチ放送が売りのはずだったが、一局で最大 3 チャンネルを流せるというマルチチャンネル（ただしHDハイビジョンでないことが条件）が有効に活用されていない。読売テレビ系は、日テレが巨人戦を放送していると全国ネットという条件が付いているので、阪神戦の中継権を持っていても生放送ができず、阪神戦は録画放送となる。本当だったらマルチ放送できるのであれば、読売テレビのAチャンネルで巨人の試合を放送し、Bチャンネルで阪神の試合を放送し、視聴者に自由に選んでもらえばいいはずなのにそれができない。

スポーツはさておき災害の際、例えば東日本大震災のとき、地元近畿では和歌山でも大津波警報が出ていた。その間読売テレビの場合、何を放送していたかと言えば東京の帰宅困難者の映像を延々と流していた。東京の情報も必要だが、ローカル差し替えまでいかなくともAチャンネル、Bチャンネルを使って大津波警報

が出ている和歌山の情報を伝え続けるということはできる。しかしやらなかった。

出席者 それはマルチチャンネルの問題より、東京の映像を流し続けることの問題のほうが大きいと思う。

脇浜アナウンサー

本当にそう思う。

私の研究テーマの一つで、今取り組んでいるのが地上波テレビ放送の「地域性」の問題である。KDDIの発行している『Nextcom (Vol13 2013 春号)』に公益事業に関連した特集で私が一つ論文「地上波民間テレビ放送の地域性についての考察」を書いた。(資料配布 10 ページ)

私は慶応大学メディア・コミュニケーション研究所の研究員で、そこで総務省の助成をいただいてアンケート調査をした。ご興味があれば報告しようと思い、資料をお持ちした(図表「よく利用する地域情報の情報源ほか 6 点」)。

なおアンケート調査の結果については質疑の後半で詳述。

(脇浜さんの講話はひとまず終わり、質疑に入る)

出席者 すごく面白く話を伺った。一つだけキーワードの問題は、これで終わったんだと、こちらが受け取って切り替えようとしたら、何か言葉を続けるアナウンサーがいる。キーワードについては局によって違うのか難しい問題だと思う。それから確かに字幕スーパーはじゃまだと思っていたが、読んでいる自分に気がつくわけ、ちょっと耳が遠くなってきたせいもある。むしろ字幕スーパーがなくなったらどうなるか、大嫌いだったが最近そんなことも考える。もう一つ、音楽のことが気になる。情緒をかもし出すためには音楽を入れるというのは効果的なんだろうが、すごくいやなことが多い。何故音楽付けてそんなに見ている側を泣かせたいのか。腹立ってくることもある。

出席者 私は逆に字幕スーパーを読むことによって自分の耳が衰えてくるのかなというような感じがする。ある年齢からジージー音がするようになった。字幕スーパーに頼ることによって余計耳が悪くなるのかなと思うようになった。

脇浜アナウンサー

デジタル放送なので視聴者に選択させればよい。「ニコニコ動画」は画面に表れる字幕を表示しないという選択もできる。折角地デジになったんだから、そこを使

うべきだと思う。

出席者 タレントもアナウンサーも昔に比べて話すスピードが速くなっている。それをいちいち聞いていられないので、字幕を見ている。昔NHKのアナウンサーの訓練ではゆっくりゆっくりしゃべって練習していた。今は速くぺらぺらしゃべっているから聞き取れないケースがある。

脇浜アナウンサー

ゆっくり話す訓練はしなくなった。

出席者 和田 精さんが作っていたドラマは台詞が速い。無理やり役者に速くしゃべらせていた。

{注} 演出家 和田 精（1893年～1970年） 築地小劇場の創立に参加  
NHK，毎日放送でラジオやテレビドラマの演出担当、「ラジオの神様」と呼ばれた。

出席者 私は現場にあまりいたことがないので、初歩的な質問かと思うが、画面構成とかスーパーだとか、結局誰が決めているのか。

脇浜アナウンサー

（番組制作の演出責任者である）ディレクター。

出席者 結局、ディレクターの問題になるのか。

脇浜アナウンサー

そうだと思う。

出席者 番組制作のやり方（企画、演出）はどこチャンネルを見ても大体同じ。やっぱり“伝染”しているのかなと思う。連絡会議みたいなものがあるからそこで決めているのか。

出席者 よその（局の）画面を見て、うちもということになっている。それぞれの制作者に創造力がないのだ。各局と違うことをやろうという意欲が全くない。

出席者 全体的な番組構成の責任を持っているのは、東京キー局のその番組のディレクターということか。

脇浜アナウンサー

ネット番組とローカル番組とは異なるが、ローカル番組の場合、プロデューサーとディレクターがあらかじめひな型をつくって話し合っている。大体色の感じを統一しようとか、この番組のイメージはブルーとか。日本テレビ系列の夜のニュース番組「ZERO」の場合、黄緑をカラーにして、黄緑感のある字幕スーパーに統一している。番組をスタートさせるときの美術を交えた打ち合わせでコンセプト（全体の番組構成、セットなども）も決まっていく。ただひな型、ある程度の形ができたならそれをずっと踏襲していくことになる。

出席者 ワイドショーやニュースに関する文字（字幕）の出し方（演出）については、マニュアルがいつの間にかできてしまって、それを踏襲しているということではないか。例えば字幕の出し方について異論が出て、しかるべき組織の中で議論して改善しようという空気はあるのか。脇浜さんは先にシンポジウムで字幕の過剰露出に触れ、「何でもありすぎる」と警告しておられたが、私も賛成。画面から文字をなくして映像と音楽で勝負すべきだと思う。

出席者 場合によっては違う。選挙速報のときはたくさん情報が画面に出るのはいいなと思うことがある。最初のところに立ち返って考えているかどうかである。これを伝えるにはスーパーが必要かどうか、考えてやっているのかどうか。皆がやっているからとか、こうするものだから、ということで字幕スーパーを出す、出さないの判断をしているのかどうかの違いだと思う。

出席者 ただ一つ言えることは、ニュースにしても、ドキュメンタリーにしても、ドラマにしてもテレビというのは瞬時に消えるメディアだから、できるだけわかりやすく、理解を深めるためにいろいろな演出、工夫を考えるとというのは原点にある。それが現在のような字幕過剰な状況に激変した。これはコンピューター・グラフィックスなどが導入されて何でもできるようになった。しかも素早くできるようになったことが影響している。昔タイトルに文字をスーパーしようと思えば、まずタイトル文字をカメラで撮影して合成しないとできなかった。字幕スーパーにも相当手間がかかった時期があった。

出席者 分業化が進んだというのは、話を聞きながらびっくりした。そんなに分業が進んでいるのかと。昔はD卓（ディレクターが指示する席）に一人座っている。タイムキーパーがつくようになるのはずっと後のこと。タイムキーパーもいなかった。

出席者 話を伺っていて、分業化が進んでいる割には中継現場でストップウォッチを持つ

ていないとか、キューシートを持っていないとか、妙な、歪な形になっているように思う。(分業が進んでいても) そのポジションのプロフェッショナルが生まれていけばいいのだが、そうっていない。

出席者 我々の時代には、生中継でも一応簡単な台本を用意した。今は日常的に生中継を行う時代になっているのでそんな手間のかかることはしていない。かつては生中継といえば電波を飛ばすための段取り(マイクロの準備など)が必要だった。

出席者 「ズームイン!!朝!」が始まったころ(1979年、昭和54年)からそうなのではないか。

出席者 「ズームイン」の初期のころは、まだマイクロの設定など中継のための事前準備(電波が通るかどうかなど下見も)をしていたと思う。

脇浜アナウンサー

マイクロ設定、そしてリハーサルなど生中継のための準備はしていた。この時代は本番までにいろいろ準備ができた。

出席者 しかしSNGが稼働し始めると、現場に中継車(SNG)が到着して10~15分で放送が可能になり、(ニュース中継などでは)それこそぶっつけ本番で放送するようになっていった。

出席者 その前にENGの登場で放送現場は大きく変わったのだと思う。

出席者 ENGやSNGが登場したとき、テレビの取材や映像表現の変化について一度立ち止まってしっかり話し合い、それこそマニュアルのようなものを作り、後輩たちに引き継げばよかった。

{注} ◎ENG (Electronic News Gathering)

1975年10月、昭和天皇訪米取材で本格導入。  
小型で軽量のビデオカメラと携帯型のビデオレコーダーを組み合わせた取材放送システム。

◎SNG (Satellite News Gathering)

1989年から稼働。通信衛星を利用した映像・音声の伝送システム。テレビの報道、情報機能を高める。

脇浜アナウンサー

やれることが増え、それにツールが増えた。しかも軽量化、簡略化している。やれることがどんどん増えているのに、そのことを思考しないまま、これができるのであれば採用しようということやってしまっている。

最近問題になっているというか、考えなければならないテーマとしてモザイクの扱い方のことが挙がっている。モザイクを安易にかけるなという話、今はモザイクをかけるのは本当に簡単にできる。昔はすぐにモザイクができなかったのでそこで一旦作業が止まる。そうすると、今回のケースはモザイクをかけるべきか、かけなくていいものか、そこで議論が起こる。ところが今はモザイク処理が簡単にできるようになったので、これはモザイクをかけるんだよねということで（議論不十分のまま）モザイク処理をしてしまうケースが出てきている。

出席者 モザイクの問題は、基本的に取材現場で、これはモザイクをかけないで放送するよという理解を取るべきだと思う。

脇浜アナウンサー

そこで何も考えないですすんでいっている怖さがある。

出席者 放送局に優秀な人材が来なくなったということだったが、私が在職していた（5年前）ころ、その兆候があった。驚いたのは、今年の春、ある大学の社会学部マスコミ学科でマスコミ系のゼミが全部定員割れしたと聞き、びっくりした。今までなかったことである。その大学はマスコミ専攻という名称をメディア専攻に変更した。マスコミではやっていけない。学生の興味の対象が変わってきている。多分先ほどから話題にあがっている「ニコニコ動画」などのほうが勢いもあるし、お金も稼げるから、そちらのほうへ学生の興味が移ったのだらうと思う。このような状況になってきた原因はテレビ番組が面白くない、面白くない原因は先ほど触れられた点に全部集約されている。昔に戻れとは思わないが、今言われたようなことを改善すれば番組が面白くなって、もっと見てもらえるようになるのではないかと考える。ところでメディア専攻に名称を変更した記念にその学科でシンポジウムを開いた。学生が約 300 人出席した。授業の一環として呼びかけたので大勢集まった。シンポジウムは3時間、一コマ（1時間半）だけ縛り（授業扱い）がかかっていたが、はじめの予測では最初の一コマが終わると参加者は半分になりますよと言われていたが、学生は3時間ほとんど席を立つことなく最後まで聞いていた。（帰った人は1割くらいか）シンポジウムが終わって何人かに聞いてみたらシンポジウムには興味があり、面白かったと話していた。参考までにパネリストは大学教授二人、朝日放送コンテンツの担当者、それに東海テレビ制作「死

刑弁護人」の斉藤ディレクター（第32回「地方の時代」映像祭優秀賞）。  
中身の濃いシンポジウムをやれば、学生も熱心に聞くということがわかった。テレビ局がもっと真剣に面白いものを作っていけば、また一生懸命やろうとする人が出てくるのではないかと思った。

脇浜アナウンサー

私もそう信じたい。  
優秀な人間が（放送局に）来なくなったということで、ちょっと別の言い方をすると、逆に“優秀な子”ばかりになった。優等生ばかりになって、我々のころはとんでもない人がいた。ハチャメチャな人、およそ一般のサラリーマンでは生きていけないような人が同期に何人かいた。そういう人がいなくなったという言い方もできる。

出席者 全く優等生ばかりになってきた。要するに番組がつまらなくなった、学生がつまらない、あるいは興味を失ってきているというのは、テレビ番組を見て面白くないからだと思う。だとすれば、当たり前の話としてそういうこと（マスコミ）を学ぼうとしない。メディアといえ、もう少し広がるから、多分学生が集まる可能性があるということになる。

出席者 「スマホ」の時代だからね。まず若い人は新聞を読まなくなった。次はテレビを見なくなる日がやってくる。そして（テレビ局が）つぶれるということになるのだろうか。

脇浜アナウンサー

私はこの間「ニコニコ動画」にはじめて挑戦してみて、わくわくした。自分の書いたコメントが映るか、映らないか、はらはらして見ていたところ、自分のコメントが画面に“来た”（表れた）、そのときやはり興奮した。  
テレビの草創期は皆さんもこういうわくわく感の中で仕事をされていたのではないかと想像する。“マイクロ通った、ここから中継できるよ”みたいに恐らくやっていたらしゃつたのではないか。このもの作りのわくわく感といったものが、恐らく今のテレビの現場からなくなってしまっているのではないかと思う。だから、今のテレビは面白くなっているのか。「ニコニコ動画」に参加して思った。これやな、この感じ、この感じと思った。

出席者 ちょっと戻るが、脇浜さんが“電腦”アナウンサーになったきっかけはどういうことだったのか。

#### 脇浜アナウンサー

きっかけは阪神大震災だった。私は文系なのでそれまでパソコンを触るなんてことはまったくなかった。ところが阪神大震災のとき倒壊した高速道路の現場でレポートしていたら、“お父ちゃんが埋まっている”と助けを求めている家族から救急車を呼んで欲しい、(電話も通じない) テレビで放送して欲しいと言われたのに結果的にはキー局の采配で中継枠がもらえなかった。

非常に無力感にさいなまれたときに、後々、あの全く情報発信できなかった神戸市の中でインターネット回線が1つだけつながっているのがあって、その回線を使って大学教授の方が神戸からずっと情報発信していることを知ることになる。だから世界中の人々がそのインターネットを見ていて世界から支援が広がっていた。国際的な支援が早く来ていたのは、そのインターネットの発信によるところが大きい。神戸に1つだけつながっていたインターネット回線で教授が情報を発信し続けてきたからだ、後々聞いて、私はちょっと真剣に(コンピューターを)勉強しないといけないと思ったのがきっかけである。

メディアのあり方が確実に変わるなと思った。そしてメディアが変わらなければいけないと思った。今まで60年前に(当時の郵政省から)電波の割り当てを受けて、ネットワークというのが組まれて、ネットワークごとに競争して、という風にやってきた。非常によくできたシステムで、それに広告がくっついて、大量の広告費があって、とてもよくできたシステムだと思う。しかし地域の時代、地方の時代、多様化の時代といわれる中で、60年前の仕組みというものがもう合わなくなっている。もっともっと地域のことを発信したり、もっと多様なものに対応できるようなことをしたりしなければいけない。それだと電波だけに頼っているとダメだと思い始めた。(“電脳”アナをめざした)きっかけはそこだった。

出席者 この間、象徴的なことがあった。テレビの特性は速報性だと思うのだが、先に触れたシンポジウムのように東北で震度5の地震があって、当然「スマホ」にも情報が流れる。たまたまその地震速報を見ていた人がパネリストの中にいて「今こういう地震の情報があつたが知っている人」と問いかけたところ、半分くらい手が上がった。ということはテレビの速報性ということはここで一つ優位性を失われていることが分かる。

#### 脇浜アナウンサー

そこでどうしてテレビの人は、電波を使ったテレビでだけしか情報を出したらあかんといった制限をしているんですかという話になる。テレビ局にはその地震の情報は入っている。だからテレビ局がツイッターを書いてもいいということにな

る。私が言っているのは、どうして自分の情報を出す範囲を電波にだけ限って、自分たちを縛っているのか、新しいツールがどんどん登場してきているのだから、民放がずっと培ってきた信用の高い、しかもいろいろなもの作りのノウハウを知っている私たちが何故やらないのか、やったらいいじゃないかと思っている。

出席者 「スマホ」の速報で情報を知ることはいいのだが、信頼性はどうか。ここが放送局の最後の砦かなと思う。そこまで意識しているかどうかつかめない。

出席者 先ほどから（番組や中継内容の）全体像という言葉が出ているが、分業化が今ほど進んでいない時期は、番組に関わっているスタッフは多分全体像を描きながらその方向にいくんじゃないか、こういった番組になるんじゃないかというようなことを考えながら仕事に携わっていたと思う。制作現場の現状を聞いていると、分業化されてしまって、この人はこれをやるだけ、この人はこの部分だけしかしない、そのところに何か（スタッフの意気込みのようなものが）伝わってこないで、視聴者に訴えるものがないのは、そのせいかなと思ったりしてしまう。ニュアンスの問題でしかないが、そういう感じがしないでもない。

出席者 すべての番組がそうだというわけじゃなくて、やっぱり見ていていい番組だなと思うものもある。だから今のテレビが全部ダメだと思わない。うれしいことに。

ここで配布した論文「地上波民間テレビ放送の地域性についての考察」に使われたアンケート調査について、脇浜さんから説明があった。

（テレビの役割を考える上で貴重なデータである）

<研究者として発言——地上波テレビはもっと“地域情報”の発信を>

地域情報のアンケート調査を全国の放送局、ケーブルテレビなどメディアを対象に行った。大都市圏にこだわって地域メディアの利用状況を調べた。

「対象局リスト（資料1）」は東京の世田谷区、茨城の水戸市、横浜市、名古屋市、岐阜市、津市、大阪市、神戸市、奈良市、金沢市、広島市、福岡市の12地点で、アンケート調査を実施した。

1ページ下の表「よく利用する地域情報の情報源」（資料2）について聞いた。

設問は「あなたは、あなたが居住する地域についての情報を現在どこから主に得ていますか。よく利用する情報源を5つ選んでください」というもの。

情報源としてテレビ、新聞、ネットなど16を特定しリストアップ。

地域情報源としてダントツ1位になったのは、地上波民放テレビ（ネットワークに加盟している局）、2位は新聞。地域情報源として特定して聞いているので3位には自治体の広報誌が入っている。NHKテレビは4位。

やっぱり地域情報として限定しても、テレビというのは一番身近で、一番頼られている情報源であることを再確認した。ちなみに5位は隣人・友人からの口コミ。ただ一つ残念なことは、地上波民放テレビの中でも県域独立局（サンテレビ、奈良テレビなど）は6位で、非常に利用者が少ないという結果が出た。

もう一つ言うと、ケーブルテレビのコミュニティーチャンネルは12位にとどまっている。口コミより利用度が低いことになる。

非常に残念な結果だなと見つつ、私が研究で提案しようとしているのは（ちょっと無謀なことかもしれないが）次のようなことである。

このアンケート結果を見て私たち民放のネットワークに加盟している局はやっぱり評価されている。だったら、我々が県域独立局やケーブルテレビのコミュニティーチャンネルの番組を作るとか、そんなことも考えていったらどうかと思っている。折角既存のものとしてあるのだから、このまま放置していいんだろうかと思うのである。こと地域情報ということに限って言うと、なんかこういう既存の今あるチャンネル、今あるメディアを利用してはどうか。我々は映像で表現するということに関してはものすごくノウハウや（制作）力を持っているので、今の間口だけで考えずに、今あるものを利用して考えるとより視聴者のためになるのではないかと考える。以上のようなことを公益事業学会で発表しようと思っている。現在資料を作っている途中である。

#### 資料の図表①調査対象局リスト

- ②よく利用する地域情報の情報源
- ③都道府県別 地域情報の情報源
- ④地上波民放テレビ（ネットワーク加盟局）と新聞の情報源の比較
- ⑤テレビ県域独立局の情報源比較
- ⑥各メディアの利用状況

出席者 今、地域情報の重要性が忘れられている、（特に地上波の民放テレビが）発信できていないのではないかという問題提起があったが、もっとどんな風になればよいと思われるか。

脇浜アナウンサー

皆さん大阪の方が多いのでしょうか。

(大阪はもちろんのこと、京都、神戸の方もいる)

私は本当に腹が立っている。何故大阪市長選のことばかり報道しなければならないのか。神戸市長選に誰が立候補しているとか、神戸市議会、兵庫県議会がどうなっているか、兵庫1区はどうなっているかとか、十分報道できていない。(特に民放テレビ局は)大阪のことばかり伝えている。私は神戸市民で兵庫県民だから、兵庫県の選挙のことも平等に伝えるべきだと思う。関西広域圏だから和歌山のことも、奈良のことも、滋賀のことも。それができないというところに電波行政の一番の穴があると思っている。それにフラストレーションを感じている。

(ここでもう一度資料の図表に戻って、地域情報の話が続く)。

資料の図表⑤「地上波テレビ県域独立局の地域情報源の比較」を見ると、7つの県域独立局のうち情報源として「あてはまる」局と答えた割合が一番高かったのは、奈良テレビの40数%。サンテレビは「あてはまる」割合が20%を切っているという結果が出た。地域情報源として認識されていない姿がこのデータから読み取れる。

調査対象局 7局

東京メトロポリタン、テレビ埼玉

テレビ神奈川、岐阜放送、三重テレビ

サンテレビ、奈良テレビ

出席者 奈良テレビが何故こんなに情報源として「あてはまる」の割合が高いのか。

脇浜アナウンサー

これを解き明かしたいと思っている。

大阪にある放送局が扱う情報としては、奈良が一番少ない。私が「ズームイン」をやっていた実感から言っているが、近畿2府4県で一番ネタにならないのが奈良。だから情報に対して飢えているので奈良テレビへの依存度が高いのかと思っている。奈良テレビがどのような地域情報を扱っているのか、量も含めて一度調査したいと思っている。三重テレビも岐阜テレビもサンテレビよりは「あてはまる」の割合が高い。

(他局に比べて、サンテレビは阪神タイガース中継のイメージが強すぎるのではないか)

図表2ページ下段の「地域情報源のテレビと新聞の比較表」を見ると、テレビと新聞の利用状況(その傾向)がもっと鮮明に出ている。関東広域圏の中でテレビが上回ったのは東京・世田谷区。サンプルとして挙げられている他の地域水戸市、さいたま市、横浜市は新聞が上になっている。つまり地域の情報源を得るために

新聞を利用している割合がテレビより高くなっているという結果が出ている。中京の広域圏でテレビが上回ったのは名古屋市。それ以外の岐阜市、津市は新聞。関西広域圏でテレビが上回ったのは大阪市。それ以外の神戸市、奈良市、金沢市は新聞。要するに、広域圏のテレビ局は本社のある自治体に関する情報を中心に扱っているから、利用者に情報源として選ばれている。それ以外の地域は（情報の少ないテレビに対して）不満を感じているから、新聞のほうが情報源として利用価値が高いという結果になった。

地方の時代といわれている中、テレビ局は電波以外にも情報を発信できるツールが利用できるようになってきているのに、（大都市中心に情報を発信してきた）この状況を放置しておいていいものか。大阪以外の支局には2～3人の記者しか常駐していない状況で、地域のメディアです、地域の報道機関です、とこれからも言い続けられるのかというところを問題提起したいと思っている。

出席者 私も全く同感、宝塚に住んで、兵庫県民だが、なんでこんなに毎日毎日、松井がどうした、橋下がどうしたというのを見なきゃいけないのか。だったら奈良のニュースも、京都のニュースもきちっとやってよという思いが強い。

ENGが出始めたころ「ハロー関西」という番組を放送していた。この番組は都市部には取材に行かない。一泊二日でD、C、AD、アナと運転手の5人チーム。1日出ると京都の北部と兵庫の北部を取材する。田舎に行ってネタを拾い取材する。帰ってくる途中、何か面白いネタがあればそれも取材する。そういう番組だった。毎日午後2時45分からニュースがあって、その最後のところで3分間、その地方の話題を放送する。毎日、近畿2府4県の都市部でないところの話題を紹介していた。街頭テレビではないが、農家の縁側で撮影したばかりの映像をチェックしていると、今お話を伺った近所の人がみんなやってきて、なんとかさんが出ている、出ていると言ってみんな大喜びだった。

大阪の本拠地がある放送局というのは、近畿各地域の情報（話題）を取材し放送する義務がある。一旦局に入ってしまうと多分忘れて、どうしても局のある大阪の話になってしまうのかなと思う。だから、地域のことを考えている人がいるということは心強い感じがした。

出席者 今の（テレビの）状況は、錯覚だと思っている。アニメ風の多彩な色彩を使ってやれば、いろいろな人に受けるのではないかという錯覚が頭に中にこびりついている。僕ら年寄りからみると（多彩な色彩が）じゃまで、情報が拡散してしまう、やめてほしいと思っている人がほとんどだと思う。それでいいという確信犯的な考え方がこびりついているから、世代間でかなり話をしないと、まともにというよりも、そういう一つのファッションがあるわけで、これからのテレビはこうで

すよという現状になってしまっているわけ。しかし 逆に言えば、一つの作品として、表現方法としてテレビというものがあって、それをどういう風にするかというディスカッションが、今の話を聞いていてもなさ過ぎる。だから皆さんがそう思っているのであれば、もっと社内で話をすれば、一つの流れみたいなものができるはずだと思う。全国のテレビ局がつまらない番組に合わせて、今言ったようなアニメ化された、毒々しいものに甘んじているというか、錯覚をしすぎていると思う。その辺の世代間の齟齬というか差というのが大きすぎるという感じがする。それ以外のことについては大賛成である。僕は（テレビ局が）免許を返上せよ言っている。

脇浜アナウンサー

私より過激なことをおっしゃる方がいらっしゃる。

出席者 規制化されて、特権階級と思っている限り、民放はよくなる。民放はもう免許を返上して、もっとフリーになっていろいろなメディアがたくさんあるわけだから、そういうところへ枝葉を伸ばして、それを含めてトータルでもっと大きなイメージというか会社としての基盤みたいなものをつくらないと、消滅するメディアになるだろうと思っている。アベノミクスじゃないけれど、規制緩和して免許を返上してやるくらいの覚悟でないとよくなると思う。ここまで考えないといけない。

出席者 いろいろな問題の根本的な原因は経営にある。先ほどの免許返上の発言も経営者に頭を冷やさせるためにそれくらいのことをやらないといけないということだと思う。高橋信三基金シンポジウムで脇浜さんはじめパネリストの方のご意見、非常に面白かった。今度は経営者を集めて「放送の未来」を語り合わない、一方に偏ったままでまずいと思う。

肝心のそこからの問題をどこで考えるのか、ということになると経営者が何も言わないので、僕がそれに代わって「テレビの未来と可能性」（第3部「論考」）で書いた。要するに全体像が見えなくなっているというのは現場の責任ではない。経営の責任だ。そこをしっかりと考えないといけないと思う。

僕は1968年に毎日放送の報道部長になった。大阪万博開催の前。そのころJNNは25局でニュース報道の分野では一番強いと思っていた。そのとき手強い相手になってきたのが日本テレビ系「ズームイン！！朝！」だった。「ズームイン」は各地方局から中継車を出して全国の朝の風景を映し出していた。それに対抗するため、JNNは「お天気カメラ」を充実させようということで全国各地に固定カメラを設置することにした。そしてJNNとしては固定カメラの設置にあたり、ニ

ューズ基金を適用することにし、財政的に地方局をサポートした。ということがあったのを思い出した。

出席者 JNNは午前7時台に番組を作った。「お天気カメラ」はその中のごく一部だった。将来的に「ズームイン」が怖いだろうということで朝の時間帯をテコ入れした。

出席者 「ズームイン」が評判をとったからだ。そのときまではJNNは強かった。今のMBSの報道は残念なことに強いとはいえない。全体の質が低下しているという風に思う。経営の責任だけれども、マスコミに入って来る人が悪くなっているというのは新聞も同じ。新聞社に聞くとそのように言う。新聞の現状を聞くと、新聞が面白くなくなっているのが新聞記者になりたくない。テレビが面白くなくなっているのがテレビを志す人が少なくなった。新聞とテレビの違いをもっと言わなければならないが、マニュアルの問題がある。マニュアル化して、パターン化していく。ちょっとこれは行き過ぎだ。これは経営の責任というより、現場の中間管理職の責任である。マニュアルは大事である。新聞社などは、お前ら勝手に勉強してこいというスタイルだった。テレビの報道も最初それを踏襲した。マニュアルを作ることが合理的ということは、あるときから分かったので、マニュアルを作った。マニュアルを使うのはいいが、マニュアルによるパターン化し過ぎはよくない。

話はそれるが、このごろ映画を見ていて感じることは、映画のエンディングのエンドタイトルが名前ばかりで長い。昔、映画は総合芸術だと言っていたが、数えてもせいぜい20人ぐらいの名前しか表示されなかった。今のエンディングはどうなっているのか。何百人の名前が連なっている。何故そうなったのか。名前を入れてやるためにそれで誇りを感じているのか。それだけで誇りを感じてはいかんね。

(あれはほとんどお金を出した協力会社あるいは協力した人でしょう)

それにキーワードの話だが、NHKのニュースを見てももっとパターン化しているね。キーワードとともにここで終わりますと言うのも全部決まっている。それとコメントも今のテレビ界からはパターン化しているために、優れたインタビューアーも出ない。優れたジャーナリストも出なくなっている。パターン化したからだ。

そういうことすべて反省することが多い。経営の刷新が必要である。

出席者 おっしゃることほとんど賛成だが、経営者は昔からダメだった。今に限ったことではない。

出席者 テレビ界は電通に近寄りすぎ。電通との関係を持たないと何もできない状況にある。

出席者 そうばかりでもない。

出席者 経営の問題も電通とどうやるかというだけの話。

出席者 もう少ししゃべらせて。前回長井氏の話の中で、番組の中身がずい分変わってきたと言っていたが、つまり昔のテレビはジャンルの幅が広く何でもありだった。映画、アニメからニュース、ドラマと全部のジャンルの番組を放送していた。このうちどんどん他のCSやBSなどにとられていった。今残っているのは何かというと、情報系の番組と吉本のタレントを使っている番組、それにスポーツ、ドラマ、アニメも残っている。今クローズアップされているのは情報系番組、これを如何に光り輝くものにするかというのが経営者の仕事で、生き残る道であるし、日本列島を活性化するというのは、それしかないと思っている。今情報を吸収できるのは新聞と既存のテレビしかない。しかし現状はテレビではなく、「スマートテレビ」になってしまった。テレビというのは消える。「スマート」しか残らないだろう。「スマートフォン」がオールマイティ、全知全能になってしまった。ありとあらゆるもの、テレビがやっていたことを、娯楽として提供できるチカラに変えてしまった。視聴者がそっちへ流れ込んでいっている。ここで不足しているのはインフォメーションでもなくて、コミュニケーションでもなくて、いわゆる一つの考え方を発想するシステムは、「スマホ」にはない。それを持っているのは新聞とテレビしかない。それをどう考えるかというのが緊急の問題だと思っている。そういう意味からいうと、毎日放送がずっといい作品を作っているというのは自分の誇りである。ドキュメンタリー関係とニュース、そして地域情報を集約して、重いコンテンツとして出すことに集中するというのがテレビの生き残る道ではないか。テレビというのも、そうすることによってまた「スマホ」に対してかなりのプレッシャーをかけることができる、という風に思っている。

出席者 話が後先になったが、メディアウオッチングの会が何故生まれたかという、今の放送はつまらない、何故だろうということで民放OB・OGの立場から考えてみようというのが最初だった。毎回こんな風なことを言いながら、そしていろいろな人に話を伺いながらまとめてきた。現場でもこういったことを考えている人がいるという認識を持っていただいて、それをお伝えすることが今までできなかった。少なくとも関西民放クラブのOB・OGたちがこういうことを考えているということをごくどこかでフィードバックしていただいたらありがたい。

出席者 テレビというのは非常に信頼されているメディアである。それから影響力のあるメディアである。そういう点ではネットメディアなどとは異なるのではないか。速報で仮に負けたとしても、テレビの生き方というのはある。テレビの役割というものをこの多メディアの中でもう一度改めて考えるという話し合う場はあるのか。テレビの現場ではどうか。

脇浜アナウンサー

そういうことを話し合う場はない。テレビの現場は相変わらず忙しすぎる。全く立ち止まって何かを考えるとというのは今もない。

昔、マルチメディア推進部ができたときに、新しいメディアのあり方、テレビがその中でどういう役割を担っていくのか、新たな戦略を考えるべきではないかなど話をしたことがある。そのとき、制作の最前線のヒット番組を作っているプロデューサーに「おまえな、俺たちは戦場の最前線で弾を避けながら、毎日この弾に当たったらアカンと思って戦争している。そんな参謀本部でなんやかんや言えるような、そんな時間はない」と言われて終わった。まさにそうなんだろうと、そのとき思った。

出席者 忙しすぎたのは昔だって同じである。弾が飛んでくるのを避けながらというのは昔も今も同じである。

脇浜アナウンサー

実はこの春、そういう状況の流れがちょっと変わったなと思った瞬間があった。読売テレビのホームページをつくったり、インターネットラジオをやってみたりとか、いろいろなことを試みてみた。しかし現場はまたそんな面倒臭いこと言ってくるみたいな扱いだった。ところが「ニコニコ生放送」を立ち上げたときに、制作現場からちょっとやりたいのだがという相談があった。現場の最先端にいるプロデューサーとディレクターがドラマをやるので、プロモーションのツールとして使いたいと初めて言ってきたケースである。ちょっと流れが変わったなと思った。現場の最先端で弾を避けている人たちが新しいことを考えないといけないということを思うようになってくれたという感じを強くした。

出席者 それは利用しようというだけか。

脇浜アナウンサー

まだその段階だが、ようやくそこまで流れがきたのかと思っている。

出席者 前のシンポジウムで構造的な問題については話されていたが、研究されている「テレビと地域性」について参考意見を申し上げたい。

やっぱり東京の問題である。東京がいかん（よくない）ということだと思う。このままいったら、選挙民は東京に集中して地方で代議士が出てこなくなる。それが憲法がそうせよと言っているというのはおかしいと思う。民主主義の選挙というのはそんなものではない。これは政治の問題だが、そういう方向にいつている。つまり、奈良テレビを除く地域のテレビ局がこの地域サービスに対して信頼が得られていないというのは、儲からないからである。何故儲からないかという人口が少ないから、消費者が少ないから、そこに投資がされないことにある。それを大阪が奈良の代わりをやったり、和歌山の代わりをやったりするだけでは解決しない。

もうちょっと地域で局が成り立つようにしてやらないといけないが、そういうことは総務省が昔から考えたことはない。（郵政省のころから）全くない。私は和歌山にいたので分かるが、中継局はテレビもラジオもたくさん必要なのだが、たくさんお金がかかる、それに見合うお金は得られない、デジタル問題と同じである。しかしそのことを当時の郵政省の役人は知らない。和歌山でローカルニュースを新宮と和歌山市と田辺で数分ずつだけ違う放送（地域情報）をしているということ（郵政省、総務省）は知らない。北海道でやっていることは知っている。和歌山でもやっているということ、総務省の放送課長は知らない。つまり、そういうものなんだ。だから地方の現状に対する認識が足りない。だからといって勉強しようとかという機運もない。しかしそこに根本的な問題があるということ、それを東京でしかものが分からない。東京が分かっておれば、全部分かっているという考え方があるということ、そこにすべての問題があると思う。

我々ネットワークの間でも、キーステーションが何もわからないけれど、何とかこれまではやってきた。我々が現場にいるころまでは、ネットワーク精神がネットワークを発展させるためにキー局は少し熱心であった。ネット局の意向を吸い上げるということに対して、今よりもっと熱心だった。ところがデジタルになって以来、特に東京局がBSのチャンネルを獲得して以来、何も考えなくてもいいようになってきた。しかもそういう状態に対して総務省は多数支配を認めようという方向でいいということになってきている。

出席者 東京はBSも独占してしまった。

出席者 大阪チャンネルを申請したが、まとまらなかった。これも経営の問題である。

出席者 お金を電通が握っている。あの面白くない夜中の番組をやって、コマーシャルをちょちょっと入れて吉本を出している。仮に関西ローカルで討論会をやる。制作費はほとんど一緒である。そうだとすれば、夜中の場合、視聴率はほぼ変わらないので、いいもの（意味のあるもの）をやろうという発想はどこからも出てこない。高橋信三は自著の「放送論」で言っている。放送はどうして作るのか、番組はどうして作るのか。その辺にあるものを買ってきて、並べているだけじゃないか。そうじゃなくて、自分のところではこれを放送しなければならない、何遍も検討し完璧になったら、スポンサーに売る、その責任はどこにあるのかといえば、その局にある。それを考えないからダメだというのである。

出席者 高橋さんはいいことを言っているのだが、その時代社長なんだから、それを実現させなくてはいけない。評論家ではないのだから。

出席者 そのためにお金を残した。

出席者 先ほど話された地上波テレビからいろいろなジャンルの番組が一つ一つ CS や BS 放送にとられていっているというのを、局側の人間が自覚しているのか、そういうことが地上波テレビが減びていくきっかけになるのかなという気がした。

脇浜アナウンサー

テレビの総合編成というもののあり方の問題だろう。結局、百貨店というものが流行らなくなって、専門店のほうが増えている。モールとかのほうが増えている。ユニクロみたいなものが出てきた話と類似していると思う。総合編成で、百貨店の都合で百貨店の売り場がこれだけだから、この婦人服売り場にはこれだけしか入っていませんよ、だからこのセーターは三色しか置いていませんというものよりも、ユニクロに行ったら、フリースが 50 色ある。やっぱり消費者は 50 色の中から選ぶようになっている。消費者がだんだんわがままになり、自分の都合、利便性をもっと上げてほしいと感じている。

だから、この間の野球中継もそうなんだが、ようやく阪神が同点に追いついたところで「残念ながら放送時間がなくなりました」とまだやっている。こんな（尻切れ）放送、若者からすれば何言っているのという話で、あなたの都合は関係ない。中継権をとったのであれば、最後まで阪神ゲームを放送してほしいと思っている人がいっぱいいると思う。それに対応していかないといけないのに、でも総合編成というのが絶対必要だと思うとそうもいかない。野球を見たくない人もいっぱいいる。このあと 9 時からきっちりドラマが始まる。始めないと苦情の電話がくる。これをもうちょっと議論しないと、今後も総合編成でいくのか、視聴者

の利便性が低くなる部分はどうフォローするのか、というのを考えたとき今の時代だと、ツールで方法があるのではないか。それがマルチチャンネルなのか、インターネット放送なのか分からないが、何か考えられるのではないかと思う。ここで皆さまのご意見を伺いたいと思う。総合編成は今後も必要か。私の中では定まらない。どうなるかずっと考えている。

出席者 それは結論が出ている。データが出ている。(総合編成は) いない。  
野球を見たい人は有料の野球専用チャンネルで見ればいいし、そうやってきている。5年後はもっと歴然とはっきり分かる。BS や CS はなんやかんや言っても今や成長産業である。視聴率調査も電通以外で民放として調査をやり直さないといけない。この番組がどこで、どのように見られているかなど実態を探れば、大きな流れというのが分かるはずである。

脇浜アナウンサー

ようやくこの間録画視聴率も入れましようかという動きが出てきた。デジタルになった時点で双方向だから、正確に分かるはずである。

出席者 テレビは新聞化しないといけない。今の新聞の役割をテレビが担うというぐらいのつもりでやらないと、そういうメディアがなくなると思う。

脇浜アナウンサー

やっぱり総合編成、社会面から家庭欄、一面から、そして三面記事があるようなものであるべきなのか。

出席者 中立、中立と言っていたのでは世の中に合わない。はっきりオピニオンを持つべきだ。

出席者 テレビの新聞化というのは、真の総合編成ということだと思う。今は総合編成と言っているが、(新聞編集の視点から見ると) 総合編成にはなっていない。それに関連して言うと、地域独立局なんかの問題は新聞の地方版と本紙、地方版と経済面との関係とちょっとつながっている。新聞を読んでいる人間は批判能力を養っている。京都発で社会面に掲載されるニュースはこういうものなのか、汚職があったら本紙に載る。小さいニュースは県版である。新聞はそういったことが積み重なって今の形ができた。それと地域独立局と広域局との関係はちょっと似たような問題があるように思う。だから新聞の経験というか新聞のやってきた失敗を参考にテレビもやったらいいんだが、残念ながら、テレビは地域独立局と

広域局は別の会社だから話し合いでできるということにはならない。

出席者 新聞との比較で言うと、テレビのニュースは浅すぎるというか、薄すぎる、やっぱり言論性という前に事象を浅く斬りすぎているような気がする。

出席者 勉強が足りないと思う。

出席者 それは僕らがしてきたことの責任でもあるのだが。

出席者 いやますます退化しているといえる。

脇浜アナウンサー

現象面を取り上げがちなのは、テレビの映像メディアとしての特質である。

もちろんもっと深いところを検証できる番組がないといけないというのはおっしゃる通りだが、私がめざしている方向というのは、それとは違う側面から見ている。じゃ現象面をとらえるのが得意であれば、もしくは要は生ぬるい、新聞のようにもっと意見を言わなければいけない、公共の電波を使っているのでバランスとか、公平とか必要だと言われるのも、逆手にとって、そうであれば、それが叶えられないのであれば、その特質を生かす方向にすすめばいい。テレビは災害のとき情報伝達手段として極めて有効だと思っている。

新聞でできないことが、テレビではその特性を生かして可能にすることがある。

“今ここで大雨が降って、水が溢れています”“今ここでがけ崩れが起きています”  
テレビは、進行形の出来事を生中継で伝えることができる得意なメディアである。もっと言うと、公共の電波を預かっているのだから、我々にはそれを伝える使命があるわけである。

兵庫県佐用町の大雨（2009年8月）のとき、私が中継車で現地に入り、常時レポートできる状況にあったが、十分な放送枠がもらえなかった。私の目の前で水が溢れ、車がひっくり返ったりして被害が出ていたが、結局、私に与えられた時間は、午後のワイド番組で2分、昼のニュースで50秒ということだった。放送枠さえ設定できれば、中継車で来ているので町を回って、ずっとレポートできる体制がとれていた。残念ながら放送する枠が取れなかったので、テレビ生中継の利点を十分生かすことはできなかった。この地域の人は読売テレビを見ている人が大勢いたが、チャンネルを合わせると佐用町の被災の状況ではなく、別の番組が放送されていたので、このとき、これは何とかしなければいけないと思った。

出席者 放送する枠がないことも含めて、(テレビの情報は)浅すぎると言える。

もう一つは映像にならなくても、伝えなければいけないことは伝えなければならぬ。その工夫が少なく、映像にあるものを重点的に扱っている。それは伝統的なことなのだが、それは違うのではないかとずっと思い続けている。

脇浜アナウンサー

その工夫の一つが読売テレビでツイッターなどソーシャルメディアを利用して、つぶやくこと。また私がよく提案しているのが、佐用町には「佐用ケーブルテレビ局」がある。そのケーブル局には記者が 2 名くらいしかいないが、ケーブルテレビのチャンネルを確保しているので、これを利用して情報を発信できないかということ。例えば読売テレビがこの 1 時間、佐用ケーブルテレビで報道する。そのあとボタンタッチして ABC、MBS、KTV という風に佐用のケーブルテレビのチャンネルを使い、現地入りしている民放のスタッフが協力して現地の人たちのために災害情報（地域情報）を伝えるという方法を取れないか、私は今提案している。

出席者 それは次善の策であって、やっぱり本来は読売テレビが全部やらないといけないと思う。それを目指さなければいけないと思う。

出席者 昭和天皇が病気の時、レギュラー番組を全部休止し、特別編成したことがある。（状況は異なるが）レギュラー番組はとばせるわけである。  
それからこの前のシンポジウムで脇浜さんが触れていた阪神大震災の時、高速道路倒壊現場での救出要請を受けた話、お父さんが埋まっているのでテレビを通して（中継して）救急車を呼んで欲しいという家族の願いに答えられなかったということだったが、どうしてそうなったのか。

出席者 これで不思議なのは何故、読売テレビが日本テレビに問い合わせたのかというのが分からない。

脇浜アナウンサー

残念な話である。

{注} 阪神大震災の時、NHK も「震災特番」の編集権が東京にあり、被災地をかかえる大阪局が自由に割り込むことができなかったことがある（特に午前 6 時～8 時台にかけて）。

司会　　まだまだお話はつきませんが、皆さん熱いでしょう。というグループが存在しているよということを是非ご記憶ください。

脇浜アナウンサー

BS 放送の免許認可に当たって、「大阪チャンネル」の構想があったことなど是非伺いたいと思います。

司会　　ちょっと時間がオーバーしましたが、このあたりで現役放送人との交流会を終わります。本当に有意義な 2 時間でした。

以上